

小学校外国語活動における6年生児童の動機づけを高める Kinectを活用した国際交流プログラムの開発とその効果

北條 礼子*・松崎 邦守**・藤田 真実***・中野 博幸****

(平成28年8月23日受付；平成28年11月22日受理)

要 旨

平成23年度より全国公立小学校高学年において外国語活動（英語）が必修化されているが、現在同活動に既に意欲が低く、不安が高い児童が38%存在していることも報告されている。このような状況を踏まえ、高学年児童の英語学習に対する動機づけを高めることを目的とし、2014年10月から2015年1月にかけて、教員養成系J大学附属小学校6年生児童62名を対象に文字学習も取り入れながらKinectを活用し、日本の文化を紹介するビデオレターを作成する国際交流活動プログラムを構築した。その結果、参加した児童は本プログラムに対して好意的な反応を示し、開発したプログラムは、文字学習の効果が上がると同時に児童の英語や外国に関する興味・関心に肯定的な影響を与えることが明らかになった。

KEY WORDS

motivation 動機づけ reading and writing of English 文字学習 Phonics フォニックス
Kinect キネクト international exchange 国際交流
language activities at elementary school 小学校外国語活動

1. 研究の背景

1.1 小学校外国語活動（英語）の現状

英語活動は2011（平成23）年度より外国語活動（英語）として全国公立小学校の高学年5・6年生において必修化され、週1回年間35回実施されている。日本英語検定協会（2013）が全国1,463校の公立小学校を対象に実施した外国語活動に関する調査の結果、平成23年度に同活動が平均年間時数として「23-35」時間と「36-70」時間を加えた実施率は5・6年生ともに93%であった。また、4年生以下の平均年間実施時数は、全く同活動を実施しなかったのは1年生では26.6%、2年生では26.6%、3年生では23.0%、4年生では22.1%であり、4年生以下でも70%以上の公立小学校で同活動が行われていたことが報告されている。

外国語活動では英語嫌いを生み出さないことが基本理念（文部科学省、2004）であったが、同活動が必修化された高学年時点で、英語に消極的な態度を示す児童が相当数いることも報告されている（横石・北條、2013）。同活動の必修化の目的が英語嫌いを作らないことであったにもかかわらず、横石・北條（2013）は、同活動に対して「低意欲・高不安」の状態になっている子どもが両学年においてそれぞれ38%存在していたと報告している。また、英語の授業が「好き」、「どちらかと言えば好き」と回答している小学生の割合は学年があがるにつれて低下する傾向があり、「英語の授業に進んで参加しているか」という問いに対する回答も同様の結果であることが報告されている（文科省、2010）。さらに、中学校入学時に「英語が好き」であり、「中学校で英語を学ぶことが楽しみ」な生徒が50%に達していないことから、吉田（2009）は小学校時代の英語の学習内容が影響している可能性が高いと述べている。

1.2 高学年児童の外国語活動（英語）への動機づけを高める手立て

現在、高学年児童において外国語活動に対する動機づけが低下することが、問題となっている。

この点で児童の動機づけを低下させない手立てとして、高学年児童の知的欲求に合致するいくつかの手立てが考えられる。具体的には、文字学習、国際交流、他教科関連内容を取り入れた活動であるCLIL（Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習）、ソーシャル・スキルを組み込んだ活動や、自律的学習態度の養成に効果があるポートフォリオの活用である。

文部科学省（2010）による調査の結果、「英語の授業で楽しいこと」の内容は、学年が進むにつれて「楽しさ」の内容が変容している。「英語の歌を歌うこと」、「英語で友達と会話すること」に対する楽しさが徐々に低下していく一方、「英語の文字や単語を読むこと」、「英語の文字や単語を書くこと」に対する楽しさが逆に向上している。ま

た、ベネッセ（2011）が中学1年生を対象に実施したアンケートにおいて「小学校卒業までにやっておきたかったと思ったこと」に対する問に対して、「英単語を書くこと」、「英単語を読むこと」、「英語の文を読むこと」、「アルファベットを書くこと」と全体を通して文字に関する回答が上位を占めていた。以上の結果からも、児童の文字の読み・書きに対する関心が高いことがうかがえる。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は第6学年児童の興味・関心・意欲を引き出す国際交流プログラムを開発することである。

本研究の第二の目的は同活動による第6学年児童の英語学習への動機づけの効果を明らかにすることである。

本研究の第三の目的は、フォニックス活動による第6学年児童の英単語の読みに対する効果を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 実験実施時期： 2014年10月～2015年1月

3.2 対象者： 教員養成系J大学附属小学校6年生62名（有効回答・回答数）

3.3 測定具：

- ①音声を聞いて正しい綴りを選ぶフォニックスに関するテスト
- ②プログラム全体に関するARCS動機づけモデルによる6項目
- ③フォニックスの規則を学んだことに関する3項目と自由記述
- ④Kinectを活用したビデオレターによる国際交流活動に関する6項目
- ⑤英語や外国への興味・関心に関する意識に関するアンケート16項目

3.4 プログラム開発に当たって

3.4.1 プログラム開発の留意点

学習プログラムの設計に際し、次の2点に留意した。まず、学習内容として、フォニックス・ルール学習（二文字子音、連続子音）は絵カードを用いて導入すること、その後、児童の動機づけを高めるためにKinectを活用しビデオレターによる国際交流活動をするため、日本の文化を紹介するための内容を考え、英文ができあがってからは、iPadを活用して、発音や抑揚に気をつけて英語らしく言う練習を経てビデオレターを作成するプログラムを考案した。

3.4.2 学習計画

開発した学習プログラムの学習計画は表1に示すとおり実施した。

表1 6年生外国語活動学習計画

回	期日	学習活動の内容
1	10月17日	○事前テスト・事前アンケート ○大学英語の学習内容説明 ○マジック e
2	11月28日	○紹介したいテーマを考える ○礼儀正しい母音
3	12月5日	○紹介したいテーマ、場所を明確にする ○二文字子音
4	12月12日	○紹介文を日本語で書く① ○二文字子音
5	12月19日	○紹介文を日本語で書く② ○連続子音
6	1月9日	○英語に直した紹介文をiPadの音声データを用いて練習する①
7	1月16日	○英語に直した紹介文をiPadの音声データを用いて練習する②
8, 9	1月23日	○Kinect撮影
10	1月30日	○事後テスト・事後アンケート ○カンファレンス（学び愛）
11	2月10日	提携校（ビデオレターの相手）の先生方が来校。子どもと共にビデオ観賞会

1 モジュール30分で各回の授業を実施したが、第1時間目には事前テストと事前アンケートを実施し、学習内容の説明も行った。実際の学習活動は、第2回目から第9回目まで実施した。

まず、ビデオレター作りに関する国際交流活動について述べると、第1時間目にKinectについての説明を行った。Kinectとは、予め取り込んだ画像と自分たちの姿を合成できるデバイスであり、ビデオレターの相手先となる台湾K大学附属小学校の6年生に日本の文化を躍動感のある映像の中で伝えることができることを児童に伝えた。第2時間目には最初に紹介するテーマについて、① Kinectを使って臨場感が視聴者に伝わること、② 特徴があり、雑学の要素があり、日本独特であること、③ 外国の人にも人気があること、④ 誰がみてもおもしろいこと、を意識して紹介したいテーマを考えるように説明を行った。その後、児童各自が関心のあるテーマによりグループ分けをし、第3時間目にはグループごとに紹介したいテーマや場所をはっきりさせた。その際、グループでどのような画像を使いたいのか、台湾の友人が興味をもちそうな内容、工夫は何かについて話し合い、場所、地図上の位置、特徴などについてポイントを分担してiPadで調べた。紹介したいテーマは、6年1組では、① 姫路城、② 彦根城、③ 金閣寺・銀閣寺、④ 和食、⑤ 和菓子となり、6年2組では、① 地獄谷、② 琉球王国、③ 厳島神社、④ 大阪、⑤ 日光東照宮となった。その後、現段階では児童が自分たちで英文を作成することができないので、まず日本語で紹介文を書いた。その際、授業者が予め定型表現を作成し、自分たちの紹介したい部分を穴埋めする形式を用いて紹介文を完成させた。紹介文の流れは、①「初めのあいさつ(全員)→② 場所の紹介→③ 地図上の位置、④ 場所の特徴1→⑤ 場所の特徴2→⑥ 場所の特徴3→⑦ その他1→⑧ その他2→⑨ 日本と台湾の比較→⑩ 誘いの言葉→⑪ 終わりの言葉(全員)」という11のステップを踏む形式であった。6年生を担当していたグループ・メンバーの2名の父親、母親がそれぞれ英語母語話者であるかあるいは英語に非常に堪能であったので、冬休みの期間中に、英文のチェックを依頼した。さらに6年生担当グループの大学院生1名が、同附属小学校のALTとして勤務していたこともあり、全10グループの紹介文をそれぞれ英語でiPadに吹き込み、児童が各自自分の担当する英文を聞きながら何度も練習できるように準備した。表2は金閣寺・銀閣寺を紹介した紹介文の1例である。

表2 金閣寺・銀閣寺(Kinkakuji・Ginkakuji)を紹介するテーマとしたグループの紹介文の例

流れ	英語	日本語
初めのあいさつ(全員)	Hello!	こんにちは。
場所の紹介	Do you know where we are? We are in Kinkakuji and Ginkakuji.	私たちがどこにいるかわかりますか? 私たちは金閣寺と銀閣寺にいます。
地図上の位置	Look at this! This is a map of Japan. Kinkakuji and Ginkakuji are located in Kyoto.	これを見てください。 これは日本の地図です。 金閣寺と銀閣寺は京都にあります。
場所の特徴①	Kinkakuji (Golden Pavilion) is a historical temple that was built in 1397. It's covered with gold leaf.	金閣寺は1397年に建てられた歴史的なお寺です。金箔が全体に覆われています。
場所の特徴②	Ginkakuji was built in 1489. It's a Japanese style temple. Inside the temple is simple and elegant. We call it "wabi-sabi."	銀閣寺は1489年に建てられました。和風のお寺です。お寺の中は簡素で気品があります。私たちはこれを「わび・さび」と呼んでいます。
場所の特徴③	Kinkakuji and Ginkakuji are in Kitayama and Higashiyama respectively.	金閣寺と銀閣寺は北山と東山にあります。
その他①	Kinkakuji is gorgeous looking because of the gold leaf. It's very beautiful.	金閣寺は金箔によってとても豪華な外見をしています。とても美しいです。
その他②	Ginkakuji has a traditional Japanese style look. It's not as gorgeous as Kinkakuji, but it's very elegant looking.	銀閣寺は伝統的で純和風の外見をしています。金閣寺ほどの豪華さはないですが、気品があります。
日本と台湾の比較(男子)	How about the temples in Taiwan?	台湾のお寺はどうですか?
誘いの言葉(女子)	Why don't you come to Japan and visit Kinkakuji and Ginkakuji?	金閣寺と銀閣寺を見に日本に来ませんか
終わりの言葉(全員)	Thank you for listening!	ありがとうございました。

第6, 7時間目には児童が各自英語での紹介文をiPadでの音声データを聞きながら自分の担当する英文の練習を行った。第8, 9時間目にKinectの撮影を行った。最後の第10時間目には、事後テスト・事後アンケートを実施し、さらにカンファレンスとして反省会も行った。さらに、偶然が重なり、ビデオレターの紹介先である、本学の台湾の提携校である大学の附属小学校の校長、英語教員2名(台湾人とアメリカ人)が来校したので、特別に依頼し、特別に第11時間目として、児童と共に作成したビデオレターと一緒に観賞し、この3名から直接フィードバックが得られた。

次に、フォニックスの活動であるが、全部で5回実施した。扱った内容は、第1時:マジック e (name, cube), 第2時:礼儀正しい母音 (rain, read, pie, boat, blue), 第3時:二文字子音 (chime, think), 第4時:二文字子音 (black, phone), 第5時:連続子音 (brown, glue), であった。活動内で読み方を練習し、児童は宿題として扱われた単語を三回ずつ練習した。

3.5 分析方法: 直接確率計算(母比率不等), マクネマー検定, 分散分析

4. 研究の結果と考察

4.1 事前・事後テストについて

4.1.1 フォニックスに関する聞き取り事前・事後テストの平均(M)と標準偏差(SD)と分散分析結果

フォニックスに関する聞き取りテスト(10問, 各1点, 10点満点)を事前テスト, 事後テストとして実施した。事前テスト, 事後テストそれぞれの平均(M)と標準偏差(SD)と分散分析結果は表3に示すとおりである。

表3 フォニックス聞き取りテストの平均(M)と標準偏差(SD)及び分散分析の結果(N=62)

事前テスト		事後テスト		分散分析結果		比較	
M	SD	M	SD	F(1, 61)	p	事前	事後
5.85	3.22	6.98	3.05	27.24	**	<	

** $p < .01$

表2から、事後テストの平均は事前テストの平均から1%レベルで有意に向上していた($F(1, 61)=27.24^{**}$)。

4.1.2 マクネマー検定の結果

表4 フォニックス聞き取りテストのマクネマー検定結果

項目内容	事前		事後		マクネマー検定結果		
	正答数	誤答数	正答数	誤答数			
1 name (マジック e)	31	31	41	21	*	<	0.01
2 blue (礼儀正しい母音)	34	28	47	15	**	<	0.00
3 read (礼儀正しい母音)	26	36	29	33	ns	≐	0.66
4 this (二文字子音)	32	30	42	20	**	<	0.01
5 long (二文字子音)	41	21	48	14	ns	≐	0.12
6 think (二文字子音)	45	17	51	11	ns	≐	0.15
7 black (連続子音)	42	20	42	20	ns	≐	1.00
8 green (連続子音)	35	27	40	22	ns	≐	0.42
9 brown (連続子音)	42	20	44	18	ns	≐	0.75
10 glue (連続子音)	35	27	49	13	**	<	0.00

** $p < .01$

次に、フォニックスに関する聞き取りの事前・事後テストの結果について、マクネマー検定を行った結果は、表4に示すとおりである。表3から、1%レベルで事後に正答数が増えた英単語は、blue(礼儀正しい母音), this(二文字子音), glue(連続子音)であり、5%レベルで事後に正答数が増えた英単語はname(マジック e)であった。あ

との6語については正答数に有意な差はみられなかった。

4.2 アンケート結果について

4.2.1 ARCS動機づけに基づく外国語活動全体に対する評価について

開発したプログラム全体の評価として、事後アンケート内で、ARCS動機づけモデルによる5項目を実施した。各項目の平均(M)と標準偏差(SD)と、5階尺度形式の頻度数を2段階(「はい、少しはい」を「肯定」、「どちらでもない、少しいいえ、いいえ」を「それ以外」として再集計した度数と、それを基にした「2:3」の母比率不等の直接確率計算の結果は表5のとおりである。5項目中「自信」に関する項目は3.41と必ずしも高い数値ではなかったが、この項目以外の平均が4.00以上(5点満点)であり本研究の参加者は好意的に評価していた。また、母比率不等の直接確率計算の結果、全5項目は1%レベルで有意に肯定的な回答数がそれ以外の回答数より多かった。ここから、本研究の参加者は文字学習を中心とし、Kinectを活用したビデオレターによる国際交流を取り入れた外国語活動について関心、関連性、自信、満足、意欲の5つの側面において肯定的な評価をしていたことが明らかになった。

表5 文字指導と国際交流のためのビデオレター作成によるそれぞれに対するARCS動機づけモデルによる5項目の平均(M)と標準偏差(SD)ならびに集計度数と母比率不等の直接確率計算結果(N=62)

項目内容	M	SD	肯定	中+否	p		比較
外国語活動は全体として:							
1 おもしろかった	4.58	0.67	55	7	.00	**	肯>中・否
2 やりがいがあった	4.42	0.67	53	9	.00	**	肯>中・否
3 自信がついた	3.81	1.22	41	21	.00	**	肯>中・否
4 満足した	4.00	1.06	43	19	.00	**	肯>中・否
5 もっとやってみたい	4.13	0.99	45	17	.00	**	肯>中・否

**p<.01

4.2.2 フォニックス活動に対する評価について

フォニックス活動に対する評価としての5段階尺度形式3項目のアンケートを実施した。5階尺度形式の頻度数を2段階(「はい、少しはい」を「肯定」、「どちらでもない、少しいいえ、いいえ」を「それ以外」とした度数と、それを基にした「2:3」の母比率不等の直接確率計算結果は表6のとおりである。その結果、項目1において1%レベルで有意に肯定的な回答数が多く、項目2については5%レベルで肯定的な回答数が多かったが、項目3については回答数に有意さはみられなかった。ここから、本研究の参加者である6年生はフォニックスの内容が中学校に行っても役立つと感じ、英語を進んで読みたくなったが、英単語を書くことについては、どちらともいえないと捉えていたことが示された。

表6 フォニックス活動に対する3項目による回答の頻度数と直接確率計算結果(N=62)

項目内容	肯定	中+否	p		比較
1 中学校に行っても役に立つ	50	12	.00	**	肯>中・否
2 英語を進んで読みたくなった	32	30	.04	*	肯>中・否
3 英語の単語を書きたくなった	28	34	.24	ns	肯>中・否

*p<.05 **p<.01

また、フォニックスに関する自由記述をみると、「フォニックスを練習したことで、リズムよく正確に言えるようになった」、「何度もフォニックスなどで練習するとだんだんめらめらに発音することができるようになった」などの児童の感想がみられ、フォニックスの規則を知って英単語の読み方を練習すると効果が上がることを実感している様子が見て取れるといえよう。

4.2.3 Kinectを活用したビデオレターによる国際交流活動に関するアンケート結果について

Kinectを活用したビデオレターによる国際交流活動に対し、事後アンケートにおいて5段階尺度形式6項目により、評価を得た。5階尺度形式の頻度数を2段階(「はい、少しはい」を「肯定」、「どちらでもない、少しいいえ、

いいえ」を「それ以外」とした度数と、それを基にした「2:3」の母比率不等の直接確率計算結果は表7のとおりである。その結果、全6項目において1%レベルで有意に肯定的な回答が多かったことから、本研究の参加者である6年生はKinectを活用したビデオレターによる国際交流活動について、セリフの量や難易度は適切であり、仲間と協力したり、iPadでの発音練習が発表に役立ち、わからない単語があってもチャレンジし、練習時間や回数についても満足感があつた、と肯定的に捉えていたことが示された。

表7 Kinectを活用したビデオレターによる国際交流活動に関する集計結果と直接確率計算結果（母比率不等）
(N=62)

項目内容		肯	中・否	直接確率 計算結果	
				<i>p</i>	
1	セリフの量は、適切であった	40	22	.00 **	肯>中+否
2	セリフのむずかしさは、適切であった	42	22	.00 **	肯>中+否
3	協力してKINECTの発表に取り組むことができた	58	4	.00 **	肯>中+否
4	iPadでの発音練習はKINECTの発表の時に役立った	52	10	.00 **	肯>中+否
5	わからない単語があってもチャレンジした	57	5	.00 **	肯>中+否
6	発音練習の時間や回数に満足した	37	25	.00 **	肯>中+否

***p*<.01

4.2.4 英語や外国への興味・関心に関するアンケート結果について

本研究に参加したことにより、児童の英語や外国への興味・関心に変容があつたどうかを検討するため、5段階尺度の16項目から成る事前・事後アンケートを実施した。全16項目の平均 (*M*)・標準偏差 (*SD*) と分散分析結果は表8に示すとおりである。表8から、16項目中8項目が事後に有意に平均が向上していた。この8項目は、項目3:外国のたくさんの人と英語で会話をしてみたい、項目4:英語そのものがおもしろくて好きだ、項目6:英語をうまく話せるようになりたい、項目7:外国の人の話す英語が聞き取れるようになりたい、項目8:英語の文を読めるようになりたい、項目9:英語の文を書けるようになりたい、項目12:外国の人と交流するとき、英語がわからなくて不安にならない、項目14:語を使って、外国の人と交流することができる、であった。英語の4技能である、読む、書く、話す、聞くのすべての上達を願い、英語への好感度も上がり、国際交流の際の不安が若干低減し、自信も幾分向上したことが示された。ただし、項目13:外国語活動で勉強した英語は、自信をもって使えるという項目内容については有意に平均が低下していた。練習時間が十分にとれなかったことが主な原因であると推測される。

表8 英語や外国への興味・関心に関する事前・事後アンケート16項目の平均 (*M*)・標準偏差 (*SD*) と分散分析結果

項目内容		事前		事後		分散分析の結果		比較
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> (1,61)	<i>p</i>	事前 事後
1	英語を話す人と友だちになりたい	3.74	1.22	3.80	1.23	0.21	<i>ns</i>	≒
2	中学校や高校の英語の試験でよい成績を取りたい	4.47	0.98	4.48	1.09	0.02	<i>ns</i>	≒
3	外国のたくさんの人と英語で会話をしてみたい	3.53	1.39	3.85	1.24	4.83	*	<
4	英語そのものがおもしろくて好きだ	3.15	1.40	3.39	1.20	5.10	*	<
5	外国の人々やその文化について知ることが好きだ	3.34	1.34	3.61	1.26	3.08	†	≒
6	英語をうまく話せるようになりたい	4.24	1.15	4.52	0.88	4.16	*	<
7	外国の人の話す英語が聞き取れるようになりたい	4.24	1.29	4.55	0.98	6.84	*	<
8	英語の文を読めるようになりたい	4.26	1.18	4.53	0.95	5.43	*	<
9	英語の文を書けるようになりたい	4.15	1.23	4.52	0.93	6.81	*	<
10	英語の発音がわからないとき、心配になる	3.32	1.35	3.50	1.39	1.73	<i>ns</i>	≒
11	英語の発音がうまくできているか不安にならない	3.00	1.45	3.18	1.45	1.59	<i>ns</i>	≒
12	外国の人と交流するとき、英語がわからなくて不安にならない	2.53	1.40	2.89	1.46	4.72	*	<
13	外国語活動で勉強した英語は、自信をもって使える	3.16	1.35	2.45	1.00	21.46	**	>
14	英語を使って、外国の人と交流することができる	2.29	1.24	2.65	1.46	6.98	*	<
15	外国人が話している英語の意味がわかる	2.48	1.28	2.68	1.40	2.30	<i>ns</i>	≒
16	外国人に伝えたいことがあれば何とか伝えようとする	3.68	1.20	3.94	1.26	3.41	†	≒

† .05<*p*<.10 **p*<.05 ***p*<.01

5. 今後の課題

本研究の外国語活動におけるKinectを活用しビデオレター作成による国際交流活動とフォニックスの文字学習を取り入れた文字学習を中心とした外国語活動は、6年生児童から肯定的な反応が得られた。グループごとに提携校である台湾の小学生に日本文化を紹介するためKinectを活用してビデオレターを作成する活動と、フォニックスの文字学習は、おもしろく、やりがいがあり、満足し、またやってみたいという反応が得られた。幾分数値が低いものの自信に関しても肯定的な反応であった。しかし、ビデオレターの英語のセリフを練習する時間が必ずしも十分ではなかったことから、練習時間のさらなる確保のための一層の工夫も必要であると思われる。

引用・参考文献

- ベネッセコーポレーション. (2010). 「小学校英語に関する基本調査（教員調査）第2部 第1章 第1節英語活動の実態」 2013年9月1日検索. http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2006/pdf/data_07.pdf
- 畑江美佳. (2011). 「英語を『読む』技能習得のための小・中連携－小学校からできる文字指導, 中学校へ繋げる文字指導－」. 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』. 12, 121-132.
- 北條礼子・大田亜紀. (2009). 「幼稚園児・小学生の知的好奇心を刺激する英語教育の学習プログラムの構築」. 『教育実践研究』. 19, 19-26.
- 北條礼子・君 佳子. (2010). 「文字指導を中心とした小学校英語活動の試み」. 『教育実践研究』. 第20集. 19-26.
- 北條礼子・君 佳子. (2011). 「小学校英語活動における文字指導の試み」. 『教育実践研究』. 第21集. 1-8.
- Klenowski, V. (2002). *Developing portfolios for learning and assessment: Processes and principles*. London: Routledge Falmer.
- 國本和恵. (1998). 「E-mail交換による児童のWriting Skillと海外の文化の認識」. 『日本児童英語教育学会紀要』. 17, 79-90.
- 文部科学省. (2010). 「英語教育改善のための調査 研究事業に関するアンケート調査（児童用）」. 2015年8月30日検索. http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afiedfile/2010/12/06/1299796_1.pdf
- 日本英語検定協会. (2013). 『小学校での外国語活動及び英語活動に関する現状調査』. 2014年7月1日検索. <http://www.eiken.or.jp/eiken/group/result/>
- 野呂忠司. (2007). 「小中連携と文字指導」松川禮子・大下邦幸編著. 『小学校英語と中学校英語を結ぶ－英語教育における小中連携－』. 東京：高陵社書店. 102-118.
- 山本淳子. (2011). 「小学校英語教育における国際交流の役割と意義」. 『新潟経営大学紀要』. 17, 103-116.
- 横石和子・北條礼子. (2013). 「児童の不安と学習意欲の関連性の類型に関する調査」. 『JASTEC研究紀要』. 32, 37-58.
- 吉田研作. (2009). 「『中学校英語に関する基本調査』から示唆されるもの」. Benesse教育研究開発センター『第1回中学校英語に関する基本調査報告書』. 2013年9月16日検索. http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/hon/pdf/data_02.pdf

The Development and Effects of Foreign Language Activities Utilizing Kinect Aimed at Enhancing the Motivation of 6th Graders for Learning English: Focused on Learning English and Making Videoletters for International Exchange

Reiko HOJO* · Kunimori MATSUZAKI** · Mami FUJITA*** · Hiroyuki NAKANO****

ABSTRACT

In April of 2011, foreign language (English in principle) activities were formally introduced into 5th and 6th graders of all the public elementary schools in Japan. In addition, the activities have been conducted for over 70% pupils from 1st to 4th graders all over Japan. Since then, it has been reported that about 38% of both 5th and 6th graders have come to dislike the English activities, it is crucial to enhance the positive attitudes of 5th and 6th graders toward these activities, so learning reading and writing English as well as international exchange can be expected to play this role of enhancing the students' motivation toward them.

From October in 2014 to January in 2015, 62 6th graders participated in this study, which utilized Kinect for making videoletters in order for the students to introduce Japanese culture to Taiwanese 6 graders of their sister school, as well as learning some Phonic rules that could help the students to read English words. Data was obtained through a questionnaire and pre- and post quizzes about reading English short words. Data was analyzed with Fisher's exact test, McNemar's Chi-squared test and ANOVA. First of all, the results of the questionnaire revealed that the project including both reading and writing English, and making videoletters utilizing Kinect was evaluated positively by the participants. Secondly, the results of the quizzes showed that the program including teaching Phonics rules was effective to improve the students' abilities of reading of English words.

* Humanities and Social Studies Education ** Hokkaido University of Education Kushiro Campus
*** Aoyama Gakuin Junior High School **** Center for Educational Research and Praxis